

## 「影追い」

2009/07/10

歩いて、立ち止まって。また歩き出しては不意に立ち止まって。

前を歩く人の不規則な足取りがいい加減我慢できなくなつた。僕はとうとう、何なんですかさつきから、とふらふら揺れる背中と言った。

声は思っていた以上にとがっていて、思わず顔をしかめてしまう。

何でもないよーなんて、間延びした調子で返されるからなおさらで、じゃあさつきと歩いてくださいよと不機嫌は止まらない。

はいはい。太子はそう返事して歩き出し、かと思ふとまたすぐに立ち止まる。

僕もびたりと立ち止まる。

そして今度は、なかなか太子は動きだそうとしないのだ。

何を見ているのだろうか、太子の視線の先を探そうとした

けど特に何がある訳でもなさそうだった。そのまま一呼吸分を待って、不機嫌を隠しもせずに吐き捨てた。

何なんですか、また、

太子が僕の言葉の途中で勢いよく振り返った。ぐい、と無遠慮に距離をつめられる、近づけられた顔に僕は息をのんでいつしよに言葉も飲み込んだ。

ひくり、と口角がひきつるのを自覚した。

対照的ににと、どこまでも楽しげに太子は、笑う。

「妹子、私の歩いた通りに歩くんだな！」

はしゃいでいる言葉をとっさに否定しなくなった。

罵倒の言葉を探して、見つからず。

かわりに奥歯をかみしめて、はつきりと眉間にしわを刻んで体の両脇でこぶしを握った。

そんな僕を気にした様子もなく、身を退いた太子は腰に手を当ててにいつと口を真横にひく。

開いて。

「なんだかうれしくってさあ！」

かあん、と。

頭上の空に響かせるような声の調子だった。

かあん、と放られた言葉が正しく僕の胸をうつ。

とくりと静かに、それでもひとときわ大きくうった心臓の音を、僕は手のひらに握り込んでなかつたことにしたい。

ああまつたくこの人はこれだから。

かみしめた奥歯がわずかにきしんだ気がして、あわててため息を吐いて力を逃がした。

それから僕は強く太子を睨みつける。

ちよつとたじろいだ笑みを壊すつもりで、強く。

「だから、さつさと歩けって言ってるでしょこのハニワが」

「えっそれどういう意味だよ」

「さつさと歩く！」

太子が近づいてくれたおかげでヤツは僕の射程圏内なのだった。

全くこの人は迂闊にもほどがある。学習というものをしないのだろうか？

ありがたくかつ容赦なく、僕は目の前の膝を蹴りつけることにする。

太子は何事かを叫んで、膝を抱えて転がった。

ふん、と荒く鼻息をもらしてその様子を見下ろした。

蹴りつける、その力が控えめだったことには気付かれただろうか。

ただの偶然だ、なんとなく、バランス崩しそうになったから、だから力が入らなかつただけなんだ。

誰に聞かれたわけでもないのに、先回りして言い訳を用意する。

その自分の反射にこっそりと打ちのめされた。

別に言い訳が必要なことをしたわけではない。断じてない。

そう思うのに、太子は僕に蹴られて転がって、大げさに痛がるくせにけたけたと笑っていてなんだか不快で不安になった。

ほら、とつと立って歩いてくださいよ。

いいですか、あんた、仕事放り出して遊んでたんですよ。

それを僕に見つかって、連れ戻されている途中なんです。

自覚ありますか？

あるんなら、ほら、とつとと仕事に戻れ！

「はいはい」

差し出す手を握り込まれた。相変わらず湿ってやがると僕は手を貸したことを早くも後悔した。

ぎゅ、と力を込められて、それだけでもうたたき落とすわ

けにもいかなかった。なぜだかそう思ってしまった。まっすぐに見上げてくるこの人の手を振り払えない。

もともとこれは、何を血迷ったか僕の方から差し出した手のひらなのだった。

なるべく何も考えないように一息で腕をひいた。力任せに引き上げる身体は背丈のわりに軽い。あまりにも。

どこまで甘えるつもりなのだろうと気持ちにとげが刺さる。僕の手なんか借りず、自力で立ち上がればいいのに、と八つ当たりのように思う。

落ち着かない心地はきつと苛立ちだ。

立ち上がってみれば相手の方が背が高い。

見上げる角度に、ついに僕は手のひらを払った。

ほら、もう、とつとと歩く。

もう何度目になるかもわからない台詞を僕はまた繰り返した。

ゆるりと笑う声が落とされる。

「はいはい」

太子の視線も笑っているような気がして、僕は足下ばかりを見つめていた。そのままじつと太子が歩き出すのを待つ。

そういえばそろそろ昼に近いらしい。

僕の、そして太子の足下から、のびる影はどちらも丸く縮こまっている。

ただの黒い塊のような影がぐるりと回り、足音とともに離れて僕はようやく顔をあげた。

またふらふらと、妙なリズムで背中が揺れている。

その不規則に合わせるのはどれだけ大変だと思ってるんだ。でもそれを言ってみるのはいさくだから僕はまたひとつ、文句をため息といっしょに飲み込むことになる。

ゆっくりと、一定の距離を保ったままついていく。

太子は歩いたり立ち止まったりを繰り返して、首だけで振り返って僕を見た。

肩で隠れて口元までよく見えない。

肩越しの視線、その目元はどうやら笑っているらしかった。

「この調子じゃもうお昼だしさ、いっしょにご飯食べてよ」

思わず、歩調がふれた。足元がつかえて息を止める。

僕が目細めたのは陽射しが眩しかったからだ。

胸の違和感は、……………何だろう、病気の発作だ、とか。

いい加減苦しい言い訳をそれでも先回りして用意する。

それから僕はなんとか口を動かして、カレー以外だったらいいですよ、とできるだけ適当に聞こえるような声を投げ返した。

## 「不合」

2009/07/31

まるで口癖のように幾度か繰り返されてきたその台詞。  
時には吐き捨てるように、時には私のことを容赦なく蹴り  
付けながら。

性質の悪い冗談のように呟いていくせに、妹子、お前の  
それは冗談じゃなかったのか、と。  
今さらながら、のんびりと驚いてみたり。

「死んでください」

ぐう、と声を絞り出すように、ゆるりと力はこめられた。  
馬乗りになられた私は投げ出した腕に力が入らなくて、ぼん

やりと妹子のそのぬるい殺意を受け止めた。

ああ苦しいお前なにやってんだ、と普通に言い返そうとし  
て、圧迫感に喉が痛んで舌の根が痺れた。

これは本気なのかなあと思考が遅れて呑気に悩み始める。  
それでもまったく抵抗する気にならないのが自分でも不思議  
だった。

両手で首を絞められて、でも氣道を塞ぐにはまだ甘いから、  
私は妹子の意思を量りかねる。

声が出せなかったのは首に絡むその指がかすかに震えてい  
ることに気付いてしまったからだ。

そうして気をつけてみれば、見上げる顔はどうしようもな  
く泣きそうだ。

伏せられた瞳が私に向けられて、でもなんだか私を見ては  
いない気がした。

自分自身が透明にでもなってしまったような錯覚のため息  
を吐きたい。

それに、この体勢はまずいと思う。二人しかいない、今は  
いい。それでも誰か他の者に見られればただでは済まないだ  
ろう。

私が、ではない。

もちろん妹子がだ。

そんな変に冷静な、ことばかりを考えた。

唇を動かす。

言いたいことがあったのに、言うつもり言葉があったのに、それをすぐに忘れてしまった。

言葉を失くした唇で仕方なく、ふわふわとしてきた脳のために空気を吸い込んだ。吸うことが出来た。

すっとした思考に空気が足りていなかったことを知るものの、この息苦しさはやっぱりまだ致命的じゃない。苦しいけれどもまだ死ぬほどではない、そのことを確認した。

あーでも酸欠でバカになりそう、おおい、そして怒るのはお前なんじゃないか？ 何してんだよ、と一人でふざけてみる。

ちよつとだけ口元を笑わせたら、喉を抑え込む力が少し強くなった。ああああ、死んじやう死んじやう、と不謹慎に思考が遊びたがる。

一向に抵抗もしない、真剣にもならない、そんな私の態度に焦れたのか、妹子の目がゆっくりと閉じられてふう、と呆れたように息を吐く。それこそ息が苦しうに。

開かれた目が、今度こそ私を射抜いて睨みつけた。

辛辣な声で、バカですね、が落とされる。

バカですね、太子、どうして逃げないの、と。

そりゃ、お前、そんな顔されて放っておけるわけないだろう、と内心ぼやく。

そんな泣きたいような顔しちゃってさ。

なんなんだよ、妹子のくせに。

何があったんだよ。

言えばいいのに。

そこまで思つて、でもまだ声は出せそうにない。首に絡む指はずつと小さく震えている。

泣いている。

「どうしてあなたは聖徳太子なんでしょね」

いとおしむ様に、と言つたら自惚れだろうか。

でも大切なものに触れるような丁寧さで、首の脈を探るように指の腹でゆるりと撫でられた。

「どうしてこんなに、遠い、のでしょうか」

殺してしまいたい、と。

ぼつりと落とされる言葉だつてまるで涙のようだ、とも思つた。

じりじりと焦らすように遅い時間の中で、指先が冷たく痺れていく。

仰向けに倒れた上に馬乗りだから、そもそも首に絡む手がなくとも苦しいのだ。

自然と眉間にしわが寄ってくる。

上から抑え込むような力のかけ方で氣道を圧迫されている、それでも呼吸を殺しきる程ではないのだから、大胆なのか、臆病なのか。

無抵抗にそれを許している自分もどうなんだとは思っては、いる。

見上げる妹子の顔はどうしようもなく泣きそうだ。

何がそんなに悲しいのだろうとにわかに胸が痛くなる。

そんな顔をしないで欲しい。

そんな顔をさせたくはない。

そのためなら何でもしてやるから、どうか甘えて欲しいと思うのにと、やらの氣持ちは伝わっていない。

だからだろうか、今、こんな状況で少しも抵抗する気がないのは。

これがお前なりの何らかの意思表示なのなら、まあ、嫌に不器用なやつだな、とは思っけど全部受け止めたい。

そしてきつとお前には何も出来ないという確信じみた予測がある。

お前はこんなことをして、試しているんじゃないのか？

私を。

あくまでも私なりの希望的な予想だけどそう思う。お前はこうしてどこまで許されるのかを量っている、それならば、どこまで許してやろうじゃないかと、意地のように思うのだ。されていることはどう見たって、他の誰かに見つければただでは済まないことだ。

私ではない、もちろん、妹子が。

それほどの危険を冒してでも何か求めるところがあるんじゃないのか。

そう思うからこそ、許すから。

何をされてもきつと許せるから。

だから何かあるのなら言うて欲しい。

こんな繋がない行動ではなくて、私にもわかるように、ちゃんと。

ぎこちない呼吸で思っ、じつと妹子を見る。

伝われ、と、強く。

不意にびくりと首にかかる手が揺らいだ。

絞り出されたため息は、あきらめる時の表情に似ている。

やがてゆっくりと手のひらが離れていくのを、不思議と残念な気持ちで見つめていた。

「けほ、と咳き込む。とたんに自由になる呼吸が喉にはりついて痛んだ。」

私から手を離れた妹子は、なぜかそのままと腹の上に座るものだから、おいおい、息苦しさがあんまり変わらなくてびっくりする。

なんて無意味。気を遣ったつもりなら間違ってる。

距離が生まれてもどかしい。これならまださっきの方が良かったかもしれない。

だって手のひらと首筋で繋がっていられた。

今は、これでは起き上がることも出来ないから、どうしたって距離が遠い。

「僕はこんなところで何をしているんでしょうね」

「呟く妹子の視線はもう私にはない。」

早くそこからどいてほしい。

これじゃ私が起き上がれないだろう。わかってやってるんだっただけいぶん意地が悪い。

抱きしめたかった。

理由なんて、そんなの、知るか。

意地の悪い妹子に苛立ってその姿勢のまま目一杯腕を伸ばす。そりゃ、と無駄に力を込めたら腕が引きつりそうに痛くて情けない声が出てしまう。

それでも何とか指先が妹子の頬に触れた。

びくり、と肩がこわばって、妹子が私を見た。

妹子の呼吸が手のひらをかすめてくすぐったかった。

妹子は苦しそうにぐっと眉を寄せて、ちよつとだけ身をかめてくれた。

指先だけじゃない、手のひらが届く。

妹子は私の手の上から手のひらを当てて、目を瞑った。

今までとは違ってやけに素直な仕草だった。

「どうしてあなたは、あなた、なんでしようか」

「つられるように思った。」

「どうしてお前はお前、なんだろうな。」

「こんなにも遠いはずなのに、こんなに傍に居て、でも、いつかこの手のひらを失う日が来るのだとしたら僕は………」

「こわい」

滲むような思考が巡る。まるで妹子に引きずられたような感傷じみた考えた。

距離なんて考えたこともなかった。その気になれば埋められないものはない、届かないものもない。

そう考えて、そうして実行して。

なあ、今お前はこんなに私の近くにいろだろう。

私たちはこうやって、触れ合うことが出来るだろう。

でももしもお前がこの距離を疎んで、捨ててしまいたいと望む日が来るといふのなら。

それを、私は恐れるべきなのかもしれない。

「こわい」

ため息に混せて呟かれるのは本心だろうか。

私はどうやってお前を甘やかせばいいんだろう。

今まで知らなかった、覚えてたの恐怖心をどう処理したらいいのかわからない。でももしも私を殺してしまいたいという妹子の、その理由がこの恐怖と同じなのだとしたら、どうか望むままにして欲しいと本気で思った。

そして私は、自分の感情とお前を持って余す。

するりと妹子の手のひらの下から自分の手を抜き取り、自

由にならない身体で、それでも両腕を伸ばして妹子の首を捕まえて引き寄せる。

妹子は簡単に倒れこむように抱きしめられてくれた。わ、と漏れた声が上がっていて、少しだけ気持ちに楽になる。

落ちてきた体の重みが肺をつぶして苦しくなる。

その痛みさえも愛おしかった。

「好きだ」

耳たぶに唇をつけて直接言葉を吹き込む。

妹子の身体が震えた。

嫌だと、言いたいみたいにゆるく首を振るから鼻先を髪がかすめた。

それでも私は妹子の頭を抱きこんで、何度だって繰り返す。

「好きなんだよ」

この言葉はそのまま呪いに代わってしまえばいいのだと思っていた。

もがいても泣いても放してやらない。

放してやれない、きっと私は、お前のことを。



結局バカな私はお前の気持ちを理解できない。

問題は自身の感情にすり替わる。

全部が全部、自分のため。

お前のためだなんてきつと死んでも言えない。

この行為だって自分の不安を失くすため。

この好意だって、もしかしたらお前を追い詰めるだけかもしれないのに、それでも自分自身を満たすために。

ごめん、はさすがに言えなかった。

もう何も言えなかった。

だから代わりに愛の言葉を繰り返した。

呪うように、何回も。

## 「咲く風の色」

2009/08/07

巻物を一つ、抱えて廊下をのんびり歩く。

先日大きな仕事有一段落着いたところで、休みにはならぬものの仕事場には弛緩した空気が漂っていた。

荒れ放題だった部屋の片付けも出来たし、散らばってもう何がどこにあるんだか把握できない書類の整理も今日で終わりそうだ。

今は、借りたままだったいくつかの資料を返却して回っているところ。

残りは腕の中のこの一つだけ。

僕の仕事場からは一番遠い資料室にこれを仕舞ってくれば、それですべてお終いだった。

遠いからという理由で後回しにしていたけれど、その距離だって心に余裕があるだけで何となく良いものに思えるから不思議だ。

普段は通らない一角をのんびりと歩く。

あまり人とすれ違わないのもいい。騒がしきから離れて、ゆつくり、ぶらり、足取りも遊ぶ。

何事にも追われていない、という状況がこんなにも快いものだとは思わなかった。一人なのをいいことにこっそり笑ってしまう。

そう、例えば、ふと強めに吹き込んだ風に誘われて、空を見上げていても何ら問題がないのだ。

特に急ぐ理由もないだろう。

部屋に帰ったところでどうせ、今日はだらだらと終業まで時間をつぶすだけなのだ。

僕の仕事場の上司もこの時ばかりは何も言わずに、その怠惰を黙認してくれるから、昨日同僚とこのままずっと暇だといいのになど冗談を言い合ったばかりだ。

本当は知っている、きつと僕は、僕たちは、このままの状態がずっと続くとしたらそれはそれで退屈してしまうのだろうと。

なんだかんだで真面目な仕事人間なのだ。

僕が知っている限りではみんなそう、朝廷にいる人間というのはいたい、退屈よりも多忙を好み、忙しい忙しいと口にしたがる。

こんなだらけた時間は、たまにあるからうれいのだ。

だから僕は、今はこの時間を思う存分満喫することにして足を止める。

中庭に面し、開かれた回廊からはそれは良く空を見ること

ができた。

眩しすぎてかえって暗く見えるような空は青く、濃い。入道雲になり損ねたような雲が点々と浮かんではゆるく流れていく。

地面に視線を落とせば乾いていて、壁の影でくつきりと線が引かれている。

今日も暑くなるなと思って、でも建物の中のここはだいぶ涼しい。

いい日だな、と心が安らぐ。  
このまま何事もなく退屈に過ぎればいいなと目を閉じて、ざ、と吹き抜ける風を顔に受けて。

「おーい！」

ざくり、と体をこわばらせた。

思わず声の方を見そうになり、しかし意識がそれを猛烈な勢いで拒絶した。

向くな向くなそちらを見るな。

さあ巻物を返しに行こう、これが最後だ、それでさつさと部屋に帰って、うん、やることないけど、とりあえずお茶でも飲みたいな。

ところで方向はどっちだったっけ。

踏み出そうとした足がとてもぎこちない。

「妹子ー！！」

「……ああ………」

聞きたくなかった声を、それでも僕の鼓膜はきちんととらえた。  
嫌だつつつてんのにもう。

無視しろ無視しろという命令がぎくしゃくと足を動かすけれども、やかましい声がずっと僕の名前を呼び続ける。

ついに立ち止まってそのまま、動き出す氣力を失った。

なんだこれ、この、氣力をごりごりともものすごい勢いでヤスリにかけていくようなこの声。

なんだこれ。

空氣を読めよ、声をかけてくれるなよ。

ため息を吐いたら、ずいぶん深いものになった。

肺がぺしゃんこになりそうだ。

がつくりと肩が落ちる。

さつきまであんなにも穏やかだった空間があつという間にぶち壊した。なんていう破壊力。少しくらいは遠慮を覚えろ。

抜けるような空の下から、抜けるような声が名前を何度僕を呼んでいる。

その声が動けない僕のすぐ後ろまで接近して、騒がしい足

音がびたりと止まる。こういう時ばかりは行儀良く。

いーもこ、と呼ばれて嫌々ながらにあきらめた。

そもそもこの場から全力で逃げ出せなかった時点でもう僕の負けなのだ。

この期に及んで無視をしつづけても意味がない。

「妹子？」

それにしてもこいつ、何回僕の名前を呼んでるんだよ。

たまたまここには他に誰もいなかったとはいえ、恥ずかしいからやめてくれ。

うんざりと、振り返る。

目の前に飛び込んできたのは赤くて柔らかい何かだった。

唇にひやりとした感触。押しつけられて、とっさに口を閉じたから息が止まる。そのまま硬直して息が苦しく、鼻から

吸い込んだ空気はほんのりと甘かった。

じゃーん、といったもの青ジャージな太子がにとと歯を見せた。きれいだろうと胸を張る。

とりあえず呼吸が不自由なので空いた手で、突きつけられた何かを太子の手ごと押しつけてどかした。

ひらりと太子が手に持つものが、視界の端で赤く揺れる。

「あげる」

「何、ですかこれは」

「知らん」

「はあ？」

「でもきれいだろ？」

太子が手首を回してひらめかす、いっしょに揺れる赤は一輪の花だった。

薄い花びらが鮮やかで、その中心の花粉は黄色く映えている。鼻の奥に先ほど吸い込んだ香りを思い出して、まあそうです

ね、とどこか上の空に返事した。心底うれしそうに、太子が笑う。

名前は知らないけど、すぐきれいだっただから摘んできた。

太子はそう得意げに言うけれど、つまりは今までこれを摘みに、どこかへ出かけていたというわけだ。

仕事どうしたんですか、と反射的に叱りそうになつて、でもよくよく考えると僕も人のことを言えたものではない。

遅れて気付いて口を閉ざした。

先日まで忙しかったのは何も僕の仕事場だけではない。

朝廷全体として追い込み体制でもあり、つまりはこの人もおそらく責務に追われていたのだろうと予想した。

しかもこいつは信じがたいし時々忘れてくもなるがこの国を背負う立場にある聖徳太子様だ。とちよつと自分でも茶化しながら考えてみる。だつて信じがたいから。

でもやるときはやる人だから、きつと僕なんかよりも何十倍も忙しかつたはずなのだ。

この人の仕事の大部分は僕の与り知れぬところにあるのだから予想しか出来ないけれど、きつとそう。

そう、思ったからこそため息を吐いて、いくつか浮かんだ文句は忘れることにした。

太子はその間にべらべらと、この花のことは竹中さんに聞いたののだ、でも探すのに苦労したのだの迷つたのだの転んだのと頼んでもいないのに細かい説明をしてくる。

僕はほんやりとしながら、ああ、空が青いなあとかどうでもない事を考えてみた。

正直そんなによく聞いてはいなかったけれど適当に、あま竹中さんに迷惑はかけないようにと言つておく。

迷惑じゃないぞと言いつちられたのでそれ以上の言及は控える。

「だからな、これ、大好きな妹子にやるよ」

差し出された花の鮮やかさに目を奪われていた。

はい、と丁寧に差し出されたから思わず受け取った。

最近忙しかつたからな、これでも飾つて癒されるがいい、とやたらと偉そうな口振りにも突つ込みを入れることを忘れ

た。

あれ、と遅れて何かが引つかかる。

今、何かおかしなことを言われた気がする。

不思議に思つて太子の言葉を頭の中で繰り返して、愕然とした。

——今、こいつ、何て言つた？

「まあ私も忙しかつたけどな！ おかげで今日は冒険で忙しいんだ。じゃあな——」

花を受け取つたまま立ち尽くした僕なんかにはもう構うことなく、太子はぶんぶんと腕を振つて廊下の角に消えていった。どたどたと騒がしい足音もどんどん遠ざかつていく。

それなのに僕は動けないままだつた。

だつてさつきあいつは何て言つた。

僕のことを。

花を、差し出して。

大好きな妹子にやるよ。

つて。

「……………」

鈍い音がして、見ると腕から滑り落ちた巻物が転がっていた。

慌てて拾おうと屈みこんで捕まえて、今度は花を取り落としそうになって強く握ってしまい、相手が花だということに思い当たって慌てて力を加減して。

「……………ああもう！」

落ち着け、落ち着け、としゃがみこんで巻物を膝の上に乗せて抱き込んで、花を持った方の手で頭をおさえて繰り返した。

たった一言に、しかも太子相手に、何をこんなに動揺しているんだ僕は。

あの人に他意はない。きっと純粹に先日までの僕の忙しさを思っただけで、花を持ってきたのだ、きっとそう。冒険だかサボりだかの言い訳にされてそんな気もしたくないけれど、うん、特に深い考えはないはずだ。

っていうかなんだそれ、深い考えって。他意って。なんだよそれ。

僕は何を期待しているの。

思い当たっていたたまれない。

それでもさっきの言葉が、どうしても耳から離れない。

大好き。

「ああもうー……………！！」

同じテンポで、同じ声音で。

何回も何回も、セルフエンドレスリピートとか。

何だこれ何だこれ。

僕は何を考えているのだと、実は混乱しすぎて何も考えられてないんだけど、その分ただただ太子の言葉を思い出してしまっただけでもない。

なんて勝手なやつなんだと思考が八つ当たりをし始める有様だ。

言いたいことだけ言って押しつけてそのままさっさとなくなってしまう。

こちらにはお構いなしなのだ、なんて自由に生きてる奴なんだ。

知ってたけど。

でもこんなのはいたたまれない。

恥ずかしいにも、程がある。

もちろん僕がだ。

あんな言葉、さらりと流して嫌味の一つや二つでも返してやれたら良かったのに！

「……………あー」

何なんだ、という疑問は当然僕自身にも向かう。

なんでこんなに動揺できるのかと、いつその状態のほう  
が不思議なのだ。

色々と辛くなってきた、壁に背中を寄せてずりずりと座り  
込む。

膝を抱えた姿勢で、ぼんやりと受け取った花を眺めた。

薄い花びらをつまんでみたらしつとりと冷たくて、指先に  
黄色い粉が付く。

くるくると回す茎はやわらかい緑で細かい産毛がちくちく  
する。

花びらに口づけるようにして香りを嗅いだ。

ほのかな甘さに少しだけ気持ちが悪くなるような気がした。  
そっと息を吐く。

なんでこんなにあの人の言葉で動揺できるのかと、いつそ  
そのことの方が異常で不思議なのだ。

どうしてしまったのだろうか、僕は。

ぼんやりと花の赤を見て、そういえばジャージ、最近着て  
なかったなと思いつ出した。

仕事を立て込んでいたし、周囲の目も気になるのでずっと  
朝服で通っていた。

どこに仕舞ったままなのだろう。探して、久しぶりに着て  
みるのも悪くないかと、思ってしまったのは果たしてあの人の  
狙い通りだったのだろうか。

わからないけれど思いついてしまったから、きつと明日僕  
はあのジャージを着るんだと。

何だか絶望じみたあきらめでそう思って、空を見上げてま  
あ暑いからちようどいいかと、言い聞かせるように呟いてい  
た。

## 「青白い病」

2009/08/14

薄闇はぼんやりと青みがかって見えていて、どくどくと耳元でやたら騒がしい音が自分の拍動だと、気付くのにずいぶん時間がかかった。

見開いた目が痛くってようやく瞬きをする、同時に今まで自分は眠っていたのだということを思い出した。は、と口から漏れた息が弾んでいる。

その荒い呼吸をかみ殺して、ついでにああ、と呟きそうになったのも喉の奥に飲み込んで、のろのろと体を起こした。奥歯を噛みしめて、両手のひらに顔をうずめる。額には汗をかいていた。そうしてみれば背中もうつすらと冷えている。思わず片手で二の腕をさすった。

ああ、と今度は、こらえきれずにため息のようにうめく。

薄闇はぼんやりと青みがかって見えていた。きつと戸口から差し込む月明かりのせいだろう。寢床からやや離れて四角

く明るい場所がある。

うつすらと、影ができる程度の明るさ。

この部屋に転がる影はふたつ。

僕のと、そしていまだ眠ったままの、あなたのと。

どんな夢を見ているのだろうか。それとも意識は夢を見ないほど深くところにあるのだろうか。

とりあえず起こしてしまわなかったことに安堵し、かたわらに眠るその安らかな顔を眺める。本当に気持ち良さそうに眠っている、その顔の、口元に手のひらをかざしてみた。

ああ、息をしている。  
生きている。

そのことにどうしようもなく泣きそうになって、乾いた目元を乱暴にこすった。

だったらあれは夢だったのだ。

それでもこの手のひらにはこんなにも、あなたの首の形がこびりついている。

あなたの首元を確かめようと思って、でもこんなにも気持ち良さそうに眠っているのを起こしてしまつたら忍びない。

そうやってためらっている振りをして、本当はただ単に怖  
いだけかもしれない。

その真っ直ぐな目に見つめられてどうした、と聞かれたら、僕は何と答えたらいい。



あなたの首を絞める夢を見ました。

バカか、そんなこと、言えるはずがない。

首に手の痕はないだろうか。あれは夢だろうか。どこから、どこまでが夢だろうか。どこまでが嘘で、そしてどこからが僕の本当の望み？

判らなくなる。何も、僕は何も判りたくはないのだ。

夢の理由も、そこに潜んでいる思いも、望みも、本当は何も、何もかも。

卑怯者だと罵られたつて構わない。できることなら全部、耳を塞いでやり過ごしてしまいたい。

僕は強くない。

こんな形で、自分の弱さを突きつけられることには耐えられない。

混乱した思考はこの青白い薄闇に溶けてしまえばいい。曖昧に消えてしまえばいいのに。

そしてできるならもういつそのこと僕も。あなたも。もうこのまま部屋の薄闇に溶けて消えて、そしてひとつになつてしまえばいいのに。

そうすれば………楽に、なれるんじゃないのか？

どうしてこんなことを考えるのかわからない。

辛いならこのまま忘れてしまつて、目をつむつてすべてを知らない振りで、朝を待てばいいのに。

甘えてしまいたいのなら、となりの人に手を伸ばして、抱きしめることだつて不可能じゃないのに。

思考が、混乱しているくせにどろどろと嫌な粘度を持って、脳にこびりついて離れない。

どろどろと、落ちていく。

例えば今ここで夢の再演を試してみるのはどうだろうか。

あなたは僕の家に来ることを誰に告げただろうか。

自分勝手に自由なあなたのことだ、どうせまた、こつそり抜け出てきたんじゃないのか。

それなら、もしも誰もあなたの居所を知らないのならば、今、ここで。

そうしたら、あなたは僕だけの、

ああ、バカバカしい。

何を考へてるんだ、僕は。

ため息が、白々しく溶けていく。

眠るあなたの顔の両脇に手をつけて見下ろしてみた。  
先ほどよりも近い距離、そして夢の中と同じ眺めに、その  
気もないのに鼓動が早くなる。

緊張しているのだと、自分自身の身体に教えられる。

「太子、起きなくていいんですか？」

僕に殺されてしまいますよ、と呟いてみた。呟いた声は震  
えていてなんだか笑えた。笑ったままねえ、太子、と呼びか  
ける。ねえ、太子、ねえ。喉元までせりあがってくる衝動を  
こらえると唇が歪むから、僕は今笑い出したいのか泣き出し  
たいのか、その判断さえもできなくなる。太子、太子、と何  
度も唱える。

「ねえ」

呟いたことは果たして嘘や冗談の範疇に入るのだろうか。  
本心だろうか。本気だろうか。もう考えることすら放棄した  
いから、僕はあなたに起きてほしい。

あなたが起きてしまうのは怖いくせに。それでも何かを決  
めることは怖いから、すべてあなたにしてもらいたい。

ここであなたが目を覚ませば、どんな風に僕を見るのだろ  
うか。どうか僕を視線で射抜いて欲しい。甘やかすような責

めるような目でどうしたのと聞いて欲しい。

こんなことを考えるのは罪だろうか。

僕はあなたを前に、懺悔できるかもしれないとさえ、思う。

そしてあなたに許されたいのだと思いついて、絶望した。

「ねえ……………」

太子、とついに声が掠れた。

月明かりがいつの間にか移動していて細くあなたの顔に射  
す。

病的にも見える色が白々と映えている。

何も考えられずに、その頬に唇で触れてみた。

うん、とむずがるようにあなたが身じろぐのを見下ろして  
いた。

ぐ、と瞼に力がこもり、ゆつくりと開く。

その様子をただただ眺めていた。

「……………うー……………？」

開かれた目がぼんやりと僕を見た。

僕はそこに映る自分を確認しようとして、目を細める。

僕は今どんな顔をしているのか、知りたかった。

「……………どうした」

あなたが寝起きに弱いことを知っている。掠れた声にまだ意識がまどろんでいるのだらうとわかる。

眠たそうな目がまだすべて開ききらずに眉間にしわが寄っている。

その様子がなんだか微笑ましいような気がして、何も、とちよつと目がさえてしまつてと少しの嘘を吐き、それから起こしてしまつてすみませんと続けて謝らうと思つた。

そう思つて何かを言う前に、伸びてきた指先が僕の頬を撫でて、目元に触れた。

「泣くな……………」

もう、だめだった。

身をかがめて唇に噛み付く。んん、と苦しげに鼻を抜ける呼吸も、かさついた唇の冷たさも、その内側の熱さも柔らかさも、何もかもが欲しくなる。

あなたの何もかもが欲しくて、欲しくて、もうだめだった。

せつないなあとかそんなこと、他人事みたいに思うところが僕の身体のどこかにはある。でも僕にはそれがどこにあるのかわからなくて、ついには存在すら疑うのだ。

こんな薄っぺらい嘘みたいな思いよりも、そんなことよりもとにかく目の前のあなたが欲しくて欲しくてたまらない。欲が脳髓を焦がす、焼け付きそうなくらい、頭の中をいっばいにする。

唇を舌でなぞり、歯列を撫でて開かせる。合わせた唇の隙間からため息がこぼれた。これはどちらの吐息だらう。その隙間さえもどかしくつて、もつともつとと奥を貪る。

濡れた音を立てる唾液が甘くて、くらくらする。追いたてられるよう口付けを深く、それこそあなたの呼吸を奪つてしまえるように、深く深く。

貪欲にそう求める中で、ああせつないなあなんてもう一度だけ思つて、白々しい、と頭のどこかで冷静に笑う僕自身を、視た。

## 「夢のひとかけ」

2009/08/22

夢を見た。

なんだかほつとするような夢だ。

どんな夢だかは忘れてしまったけれど、朝、目を覚まして体を起こし、思わずそのままずつとぼーつとしてしまうような。

そんな、ほつとするような夢だった。

らな！」

「仕事しろ！」

「します！」

いかん、殴られたショックで思わず心にもないことを言ってしまった気がする。気のせいかな。

ともかくにも私は涙目で今しがた殴られたばかりの頬をさすって、もう片つぼの頬は床にくっつけてあーひんやりしてて気持ちいいなーとか思っている。

要するにぶつ倒れる。なんていったって妹子のパンチは強烈だからな。くっそー、何だってこんなにいいパンチ持ってたんだこいつは。殴られる方の身にもなれっつての。

一度くらいかわってやろうかと必殺撰政パンチをくらわせるチャンスを狙ってはいるし鍛えてもいるのだが、いっこうに勝てる気配がない。殴った瞬間に返されたりするし。もうなんなのこの子もうイヤだ。

「そこでいつまでもうじうじしてんな！ 帰れ！」

立ったまま私を見下ろす妹子は、なんか知らないけど一人で勝手に怒っていた。じつと見つめてたら余計に苛立つたらしくてなんか今にも地団太とか踏みそう。うむ、いかにも悔しそうな態度にちよつと気分が良くなった。私の何がそんなに妹子を煽ってるのか知らないけど。いい気味だ。やーいザ

「だからそのままバカみたいにぼけーつとしてて、それで？ 仕事さぼったと？」  
「バカみたいってなんだ！ それにさぼってなんかないぞ。二度寝、三度寝と、同じ夢見れないかって一生懸命だったか

マミローとか言ってみたくなる。

で、言ってみたら地団太の代わりに思いつきし横顔を踏みつけられた。あんまりだ。

「いいじゃないか別に。夢を思い出したっていうささやかな願いじゃないかー」

「夢が見たいならどうぞそこで一生眠っててください」

二度と起こしませんので、と付け足しでひどく辛辣な台詞を吐き捨てた妹子が、はーやれやれとあからさまなため息をつく。隠そうともしない乱暴な足音が離れていく。

ようやく私も起き上がったら、ちょうど妹子が卓に向かって座るところだった。

もう、仕事か。何となく頭をかいて、ずれてしまった冠の位置を直す。もう私にはかまってくれないらしい。とたんにつまらなくなつた。

ため息をつきたいのは私の方だったの。全く。

妹子が筆をとって、しばらくさらさらと調子良く文字を綴る音がしていた。

つまらないの。

でもそわそわと体を動かして、どれ、後ろからのぞきこんでやろうかそれともしびれてるかもしれない足でもつついてやろうか、と思つたとたんにもすごい勢いで振り返られて、ぎっと音でもしそうでない殺気立った視線が飛んできた。びっくりして、思わず正座してしまった。

妹子はゆっくりりと卓に向き直つたけど、背中からはわかり

やすく邪魔をしてくれるなというオーラがただ漏れていて、困る。

だからまあ、そんな空気は無視して突撃してもいいんだけど、その時は何となく、大人しくしていようと思つたのだ。

代わりにじつと、妹子のことを観察している。

卓に向かうときの妹子はたいいてい正座だ。しゃんと背を伸ばして、正しい姿勢。それからきつと無表情。今は後ろ姿しか見えないけどきつとそう。だって妹子はたいいていどこか怒ってるような無表情でいるのだから。

もつと笑うか、そうじゃなくても力を抜けばいいのに。思つて私は、そういえば前に一度だけ、なんでそんなに怒ってるの、と聞いてみたことを思い出した。その時は確かあんたのせいですよとか言われたっけか。僕を怒らせてるのはあんただと。

いやまあそりやそうかも知んないけど。いや私が言いたいのはそういうことじゃなくつてさ、とわざわざ聞き直した覚えがあるから間違いない。

「何で妹子はいつも、そんなに無表情で怒ってるみたいな顔するの？」

そしたら妹子は、ちよつと考えるように押し黙つた後であつさりと答えた。

「ふつうでしょう、これが」

れいな姿勢。

「それで、どんな夢を見たって言うんですか？」

静かな声が、疑問形に語尾を持ち上げた。

一瞬ぼけっとしてしまった。妹子のその姿勢の良さに見とれた。

それからつられて私も背筋を伸ばして、ようやく何か答えないと、と頭が焦った。

「え、つとー、うん、なんかよく思い出せないんだけどな。とにかく、なんか、いい夢だったと思うんだよ」

焦りながら、とつさにこんなのは反則だって思った。

反則だよ。だって、さっきまでは何の興味もないみたいなお態度だったじゃんか。

怒ってたし。突然話がそこに繋がるなんて思ってもいないから、嘘にしろ本当にしろ、何を話そうかなんて用意できてなかった。

反則だこんなの。

困って慌てている私とは対照的に、へええ、とあまり興味もなさそうに妹子は呟いて、それでも体はそのまま私に向いている。

「二度寝、三度寝を楽しむくらいの夢ですもんね。さぞかし

ぼかんとしてしまった。  
ふつう、ふつう、と二、三度繰り返してからふうんと呟いた。

まじまじと妹子の顔を見たらやっぱり怒った顔してさらに眉間にしわを寄せて、何なんですかこっちは見ないでくださいとか言っていた。

ふつう。

その言葉にこんなにも不思議な感じがしたのは初めてだった。

だからその時、いい加減耐えられなくなったのであろう妹子に殴られるまで、無表情の不機嫌をふつうと言いつけるこの男をじつと見つめ続けていたのだ。

そういえばそのときも強烈なパンチだった。

思い返しただけでなんだか痛いような気がして頬をなでる。うん、あのパンチを何度もくらってよく平然としていられるもんだ。実は私つてすごいんじゃないの、とちよつとにやっついてたら突然妹子が振り返った。

うっわなんだこいつ。さっきから何なの。私まだ何もしてないよ。っていうかなんなの、背中にも目でもついてんの？とちよつと恐怖しても一度姿勢を正す。

よく見たら筆は卓の上にきちんと置かれていた。

妹子は正座したままの膝を動かして、正面を私の方に向けてくる。

何も持たない手を丁寧な膝の上ののせて、軽く握って、き

楽しい夢だったんでしょね。例えばカレーまみれとか」  
「……………もしかしてお前それ嫌味か？　そんなもって、私  
のことなんだと思ってるの？」

こいつはこんなにも失礼なやつなのに、うれしい。相手を  
してもらえるのがなにか興味を持ってもらえたことがなにか、  
それとも実は話し相手が欲しかっただけで別に誰でもいいの  
かとかめまぐるしく思考が巡って私は答えを探せない。

ただひたすらに、困る。  
妹子はのんびりと首を傾げる。

「内容は思い出せないですか」

「そうなんだよな、何でだろうな。何で夢ってあんなに忘  
れやすいんだ？」

「知りませんよ」

それでも妹子が聞いてくれたのがうれしくて、でも思い出  
せないから話せることなんかあんまりないんだけど、何と  
か会話をつなぎたくて、とか、一度にいろいろ考えたらやた  
ら落ち着かなくて闇雲に腕が動いた。

「あ、でも」

振り回した手のひらが意志とは関係なくぴたりと止まった。  
わたわたと騒いでいたらふと、うつすらと何かが頭の隅っ

こに引つかかった。それが感覚に変換されて、何かに触れた  
錯覚を手のひらに起こす。

ぎゅつと握りしめたら、朝、起きたとき、ぼーつとしてい  
たとき。その時のほつとするような気分がふわりと戻ってき  
た。

引つかかったものを何とか手繰り寄せたくて、その手でこ  
めかみを強めに押さえた。そつと深く息を吸って、細く吐き  
出す。

何か、何か何か何か。引つかかって、思い出せそうで、お  
ぼろげなんだけど、そう、もうちよつと。

そんな風に、たかが夢の話なのに、私は嫌に真剣に考え込  
んでいたのだと思う。

それでも必死に考え込む間、そういえば妹子はじつと静か  
に待っていてくれたのだった。

そしてふう、と息を吐く拍子、もどかしい手のひらがよう  
やく、ひとつだけ夢の欠片を捕まえた。

「お前が……………」

「え？」

「お前だよ、そうだよ！」

思い出せたのがうれしくて、勢いに任せて立ち上がった。するとこんながらがったものが解けて手繰られていく。に、と口が勝手につり上がって、笑った。

「妹子だよ、そうだよ、お前がいたよ」

びしっ、と突きつけた指の先で、妹子は最初呆気に取られたような、不思議そうな、どう反応したらいいのかわからないみたいな顔をして停止していた。

逆に私は止まらなくて、そうだよ妹子がいたんだよ、だからなんか楽しくって、だからたぶん、ほっとするよな夢だったんだよと思うまを言い続ける。

言葉にしてみたらそれが正解な気がした。

そうだよ、妹子の夢だったんだよ。

もやもやが晴れた私はやけにすっきりした気持ちで気分が良かった。

その気持ちをわかって欲しくって、まだ動けない妹子ににっと笑いかける。

お前の夢だよ。

「バカらしい」

返されたのは、取り付く島もないようなそっけない感想だった。

なんですか、そこまで引く張っておいてそんなオチですか、夢でもあんたはバカなんですか。なんでですか、あんた、夢でも僕に迷惑かけてんですか？ 勘弁してくださいよ。ただでさえ大変だって言うのに、そんなところまであんたの相手をさせられたら僕はいつ休めばいいんですか。もっとまともな夢見れないんですか、とかうんぬんかんぬん。

きゅ、と一度力がこもったように閉じられた唇から、次の瞬間には流れるような文句が吐き出された。

めずらしく、流れるようによどみのない長々とした台詞回しに、よくもまあこんなにつつかえずにしゃべれるもんだと感心してしまった。

返されたのは、取り付く島もないようなそっけない感想だ。それなのに、どんなに強い言葉を使ってもそこには罵倒



の響きを見つけることはできなかった。

うん、うん、と適度にあいづちをうつてその様子を私は見つめる。

ぎゆう、と妹子がせわしなく唇を動かしながら、膝の辺りで手のひらを握っていて、服が強くしわになっている。

ついではつきりと眉間にもしわを刻んでいたけど、それは、いつものような不機嫌とは違って見えた。

だからうん、うん、と適当に聞き流して、適当に言葉を拾い上げて、ただ吐き出される言葉を聞いていた。

思わずそのままずつとぼーっとしてしまふような、ほっとするような、そんな気持ちで私はいた。

「……………もう、いいです」

お終いも最初と同じ様に突然だった。

満足したのかも言うことにつまったのか、表情を見る限りでは明らかに後者なんだけど、最後に妹子はそう呟いてまたきゅ、と強く唇を閉ざして、雑な動きで卓の方に向かった。筆を取って、あつという間に書き物の姿勢に戻る。

さらさらと筆の走る音を聞いて、立ったままだったことに気付いた私はようやくまた座り込んで、妹子の後ろ姿をじつ

と見つめた。

さらさら、さらさらと文字を綴る音がする。

けれどもそれは不意に止まったり、走り出したりを繰り返して、何かにつまづいているような印象を受ける。

つまづく度に妹子は、いらいらとため息を吐いて、腕が大きく揺れる。

私はというとその度に、なんだかにやにやと頬が緩むのがどうしようもなく、今度は体育座りをした。

並んで立てた両膝の上に腕を組んで、顔をのつける。その腕に緩みつばなしの頬を押しつけて何とか堪えてみようとする。

まあ、無理なんだろうなつてのはわかってたけど。一応努力はしておかないとな。

だつてまた突然妹子が振り返ったとき、こんな顔してたらきつと怒られる。たぶん手元の何かを投げつけられる。別にそれでもいいんだけど。そんな妹子も見てて楽しいからぜんぜんいいんだけど、まあ、一応。

なんか、訳もなくうれしいなあ、楽しいなあ、つて思う。

止められなくて、止まらなくて、止めたくない。

ああ、楽しいなあ。

その楽しい気持ちのままに、声には出さないとしゃんと伸びた背中に言ってみるのだ。

無表情でも怒ってるみたいでも怒りっぽくつても構わないよ。

私はちゃんとわかっているから。

お前がやさしいやつだって、ちゃあんと私は、わかっているからな。

そんなきつと、面と向かって言うにはちよつと照れてしまいそうなことを声に出さずに言ってみた。

妹子はきつと気付かない。それでも伝われと思つてしまった。

浮かれっぱなしの感情はこの思考を恥ずかしいとも自覚できず、やばいなあ、まずいなあ、と呟いても実感が無い。

ぼーつとするような、ぼつとするような、こんな気持ちはどうしようもできなくて、ああなんだろこれ、夢なのかな、とかこつそり呟いた。

## 「然様なら」

2009/08/30

涙が溢れて止まらなくて途方に暮れる。  
奇麗なものはどうしてこんなに胸に迫るのか。  
じくじくと痛む胸の内、どうしようもなく、途方に暮れる。

奇麗なものはいつだつて、どうしたつて遠いの。  
どうしてこんなにも、——手を伸ばしたくて、たまらない。

「どうした」

なんで振り返ってしまっんだ。なんで放っておいてくれな

いんだ。

八つ当たりする思考と喉に詰まる呼吸をどうすることもできない。

気付かれなければよかった。そのまま置いて行ってくれたらその方が良かった。

そんな、心にも無いことを考えて、どうかこれが僕の本心になればいいと強く願った。

僕は立ち尽くす。涙が溢れては止まらない。きつく目を閉じればくつをばたりとしずくが叩いた。

どうした、と言うあんたの声に慌てて、うつむいて目元を袖で乱暴にこする。

それでも涙は止まらない。

どこかが壊れてしまったみたいに止まらなくて、息が苦しくて胸が痛い。

やさしく、名前を呼ぶ声ですぐ近くから。

伸びてきた手を僕はとっさに払った。

息をのむ気配。それから沈黙。

こんな様を見られたくなくてうつむいて、顔を上げることができない。

放っておいてほしいのにあんたはどこにも行ってくれない。でも口を開けば声が震えてしまいそう。何を言うこともできなかつた。

僕の名前をあんたが呼ぶ。

聞いていられなくて僕は耳を塞ぐ。

それでも手のひらの隙間から声は忍び込んでくる。

「妹子、どうした」

首を振る。今は、何も言いたくない。答えたくない。

「どっか痛いのか」

痛い、痛い。

喉とかこめかみとか目の奥とか、何よりも胸が詰まるように痛い。

でもそれはすべての理由ではない。

「それとも桜、嫌いだった？」

そんなことはない。

太子の連れてきてくれた桜の木は立派だった。

散々太子が自慢していたように、どうしようもなく奇麗だった。

そう、悲しいくらいに。

「それとも、……………私のこと、嫌いになった？」

そんなこと、……………あるはずがない。

だから僕は今、悲しいのだ。

太子が僕の顔を覗き込むように身を屈めた。

耳を塞いだまま、嫌だ、と僕は首を振る。

夜桜見物に行こう、と太子が高らかに言い放ったのは仕事が終わった後だ。

特に断る理由もなく、でも渋々といったポーズだけは保って、太子に案内されるままついていった。

僕の知らない、随分辺鄙な場所にそれはあった。

古い桜の木が静かに佇んでいて、月明かりの下はらはらと花びらを散らしていた。

儚くて厳かで奇麗だった。

その木の下で太子が聞かせてくれたのは、歴史の話とこの国の話。

普段のふざけた様子が嘘みたいに落ち着いて話す、その横顔にいつもこれくらい真面目ならいいのにと思いながら、胸に微かな違和感を覚えた。

その正体を確かめる間もなく、ふっと太子が僕を見て、見据えて、目を細めて笑った。

違和感がもはや、痛みと言っていいくらいまで増幅する。

「好きだよ、妹子」

静かに、太子はおそらく決定的な一言を放った。

「だからずっと、いっしょにいてほしい」

もうどこにも戻ることはできない、と、とつさに思ったのはそんなことだった。

涙が溢れて止まらなくなつて途方に暮れた。

奇麗なものは胸に迫る。

いつだって、どうしたって遠いのに、手を伸ばしたくてたまらなくなる。

そして手を伸ばして、その距離に打ちのめされてそれでも好きだったから、もう、苦しくても辛くてももう、どうでもいいように思ってたんだ。

そこにいてくれればそれだけで満足しようと、しなきゃいけないのだと、思っていた。

それなのにまさかあなたの方から手を伸ばしてしまうなんて。

無視できなくなる。あなたの想いも、僕の望みも。

でも許されない恋だから。

だってあなたは皇子なんでしょう。

どんなにふざけていてもそれは事実で変えようのない現実。

僕なんかを相手にしてはいけない。

あなたは、本当はそういう人なのでしょう？

それでも気付かない振りをしていればこのままでいられると信じていた。

あなたの気の向くままに、となりにいることを許されると信じていた。

それなのにあなたは言ってしまった。

そしたらもう、……もう、無視することなんかできるはずない。

あなたの僕に対する感情がどんな種類のものなのか、それくらい、わかつてたに決まってるだろ。

隠そうともしなかったもんな。だから、僕がどれだけ苦勞して、気付かない振りをしてきたことか。

それでも僕は納得した上で、どんなに辛くたって、気付かない振りを続けてきたのに。

続けていけるのだと、思っていたのに。

僕は、返事をしなかった。

ただ馬鹿みたいに涙が溢れて呼吸を不自由にする。喉を塞ぐ。

そんなことを言い訳に、僕は何も言わないままであつむいている。

混乱した思考の中、ある一ヶ所だけが、嫌に冷静に答えを囁いている。

拒め、と。

なぜならお前の目の前にいるその人は、お前なんかには手の届かない人なのだから、と。

この人はお前から求めることもできない人。

これは、どんなに好きだとしても手を伸ばすことも許されない恋。

例え相手のほうから手を伸ばしてくれたのだとしても、それを払いのけて、拒まなければいけない恋だ、と。

そうやって理性みたいなものが、言い聞かせるようにずっと答えを囁いている。

でもそれを言葉にするには涙が邪魔で、そんな言い訳ばかりをまるで子供みたいに繰り返して、僕は何も言うことができないうまま立ち尽くす。

もうどこにも戻ることもなんかできないと悟ったはずなのに、往生際悪く何か別の方法を探している。

このままうやむやにしてしまえば、とか、そんな卑怯なことばかり考えている。

例えば、どうすればこの話をなかったことにできるのかと、そんな残酷なことばかり考える。

気付かない振りをしていればそのままいられた。

それでもこのまま何も言わなければ、また元の二人に戻れはしないだろうか。

決定的なことを口にしたあなたの気持ちが変わらないわけではない。

その願いは僕と同じものだ。

それでも僕は、その願いを殺してでもただの二人でいたい。今までの関係を変えたくはない。

手を伸ばしてその距離に、打ちのめされるのはもう嫌だ。だから、お願い。

このままで、いさせて欲しい。

あんたが一方的に想いを口にしたように、同じ強さでそう望むから。

僕の臆病とわがまをどうか許して。

太子が腕を動かす気配がして、思わず体に力がこもった。躊躇うみたいにあげられた腕がきつと、僕の背中に回り抱きしめようとしている。

そうされたいと思った。行動があれば、拒むことができる。されたくないと思った。もしもそれでも拒むことができなかったら、どうしたらいいのかわからない。

「……………妹子」

太子は、何もしなかった。

迷う素振りでさまよった腕が下ろされて、太子がしゃがみこんだ。

うつむいているから目が合ってしまった、耳を覆っていた手で目をこすつて隠した。

もう片手があっさり太子に捕まってしまう。

じわりと伝わってくる体温がいつもより高い。

気付いてしまって、もう、振り払うことはできなかった。

「かえろ」

太子がどうしようもなくやさしく、笑う。

いつもからは想像もつかないような笑い方。

気遣われているのだとわかって、そんな表情をさせてしま

っているのが自分だと自覚して、どうしても涙は止まらなかつた。

何も言えなかった。

「なあ、帰ろう。冷えてきたし、それに私カレー作ったんだ」

手を繋いだまま太子が立ち上がる。

落ち着いた声音のまま、いつものように間の抜けたようにしゃべるのがどうしたって不自然だ。

太子は僕の答えを待たずに手を引いて歩き出す。

僕も手を引かれるままに、歩く。

太子が何かをずつとしゃべっている。

犬の話、クローバーの話、カレーの話、馬の話。

どれもこれも耳を素通りしていつて、でも静かじゃないことにこんなにも救われたことはない。

「僕、家こつちですから」

「何言ってるんだよお前、私の家はこつちだし」

「太子こそ何言ってるんですか。僕もう帰りますよ」

「カレー作ったって言っただろ。食べて行きんしゃい。作りすぎて困ってるんだよ」

「なんだかんだで太子ひとりでもいくらでも食べるじゃないですか」

「ひとりじゃおいしくないんだよ。いいから、摂政が呼んでるんだからおとなしく来いよ！」

二人の間に流れる空気は、上辺だけはいつも通りのままだった。裏側に潜む想いまではもう考えたくない。

もう破綻してしまった均衡さえも気付かない振りを僕は続けて、それに対してあなたは何も言わない。

ただいづれおりの強引さに、結局今日もこうやって僕は流されてしまうんだろうと思った。

流されてしまう振りをする。

つなぐれた手が痛いくらい強く握られている。太子はぐいぐい僕の手を引いて振り返らない。

核心的なことはもう何も言わなかった。

僕も、あなたも。

あなたの想いは宙ぶらりんなまま放っておかれて、それをあなたは許してくれて。

僕はこんな弱い自分が大嫌いで、一方的に想いを告げたあなたをずるいと思いつつも嫌いになることなんかできやしない。

僕の帰る場所と太子の帰る場所、いつもの分岐で、あなたがこの手を引いてくれるなら僕は動き出せる。

それでも僕とあなたの想いは、きつとその場に置き去りだ。僕はずっと卑怯にもあの分岐で立ちすくんで動けずに泣きじゃくる。

あなたは僕に触れることもできずにしゃがみ込んで僕の顔をのぞき込むだけ。

繋いだ手の熱さを感じても、そんな光景が頭から消えてはくれなかった。

想像の中で桜の花が、はらはら、泣いてるみたいに二人の上で散っていった。